

西駒演習林における 標高に応じた樹幹生地衣類の種組成

矢久保允也（信大・理）・池田彬人（信大・理）・佐藤利幸（信大・理）

背景

中部山岳域は日本の中でも高山を多く有し、そこに生育する生物種も温帯から高山帯まで様々な生物が生育している。地衣類も例外ではなく、この地域が日本における北方系地衣類また南方系との境界となっている。また原色日本地衣植物図鑑の掲載種のうち5.6%ほどは中部山岳域などの制限された区域にのみ分布している。このように中部山岳域が地衣類の分布にとっても重要な地域ではあるのだが、そこに生育する地衣類についての基礎的な研究はまだ成されていない。そこで本研究は、中部山岳域に生育する地衣類の種組成が、標高に応じてどのように変化するかを探ることを目的とした。

方法

今回の調査は信州大学農学部の附属演習林である西駒演習林にて行った。演習林における植生調査、土壌調査などの先行研究が信州大学農学部演習林報告書に掲載されているために、地衣類だけでなく、他の生物種や土壌、その他の気候的要因を合わせたの考察ができることが期待される。

西駒演習林には複数の登山ルートがあるが、その中でも今回の調査は桂小場～大樽小屋～西駒山荘へと抜ける一般登山道にて、標高およそ1600m～2600mの区間にわたり8つのサイトをとり調査を行った。

調査は1つのサイトにて、最大で7本の樹木を用い、1本の樹木に一辺10cmのコドラートを用い、東西南北の4方位ずつ、胸高と基部について合計で8つのコドラートに着生していた種を採集し記録した。

結果

今回の調査の結果、樹幹に着生する地衣類はその着生する位置が胸高と基部かで種組成が大きく変わり、基部においては特にハナゴケ属が頻繁に着生するように思えた。このことはマツ科のマツ属を用いた先行研究でも示唆されていた通りである(S. A. Pirintsos *et al.* 1993)。

一方、標高に応じた地衣類の種組成であるが、サルオガセ属やホネキノリ属、フクロゴケ属、カブトゴケ属などのグループらが出現する標高にはなんらかのパターンがあるように思えた。また、調査を行ったサイト間で地衣類のホストとなる樹種が異なっているので、その種組成に樹種が影響を与えている可能性がある。

今後の課題

上述のように、今回の調査では地衣類の着生しているホストがその種組成に与える影響を無視することができなかった。今後の課題としては同ホストで標高に応じた種組成の変化と、同標高で異なるホストに応じた種組成の変化を比較する必要がある。